韓国人日本語学習者における言いさし表現の習得研究
ーOPIデータを資料としてー

曺英南

1. はじめに

近年、日本語学習者の語用論的な側面に関心が高まっている中で、述部が省略された発話については、その重要性が主張されはじめているが、まだその使用状況が明らかにされているとは言えない。特に、実際日本語学習者の会話データを通して、述部が省略された発話全般を対象として、語用論的側面に着目して研究したものは管見ではあまり見当たらない。

そこで、本研究では初級、中級、上級、超上級の韓国人日本語学習者のOPIデータを資料として、言いさし表現の習得過程を明らかにする。

2.先行研究及び本研究の位置付け

先行研究では日本語母語話者に比べ、日本語学習者は言いさし表現があまり使えないという結果が出ている（柏崎：1993）、生駒・志村：1993）。また習得レベル別にみると、初中級日本語学習者は言いさし表現があまり使えないのに対して、中上級日本語学習者は過剰使用する傾向が見られる研究（佐藤：1994、山本：1989）と日本語母語話者へ接近していくことを指摘している研究（鮫島：1998）という二つの見解がある。しかし、いずれの先行研究でも言いさし表現の形式の面に焦点を当てたものが多く、実際、学習者の自然発話を対象として言いさし表現の使用する状況を体系的にとらえているものは皆無に等しい。

そこで今回の発表ではまず韓国人日本語学習者を対象としてレベル別に、全体の発話数に対する言いさし表現の頻度とその使われる状況を明らかにし、習得過程を明らかにしたい。

3.研究方法

3.1分析資料

本研究の分析資料はKYコーパスと呼ばれるOPIテープを文字化した韓国人日本語

学習者30人の言語資料である。その30人のOPIの判定結果別の内訳は、初級5人、中級10、上級10人、超上級5人である。

3.2言いさし表現の定義

言いさし表現は形式上、述部が省略されていると見られる発話であり、それで相手の発話の継続を促す「うん」「はい」のようなあいづち的発話以外の発話で話者が交替した場合である。

言いさし表現は話者の発話の完結の有無によって、以下のように分類できる。

(1)完結の言いさし：話者の発話が完結し、それで言い残すような感じがない言いさし

例1) T：夏休みの計画はありますか？

S：ま、一応帰るんですけど、帰る前、もし、あの、あったらアルバイトしてみよと思ってますけど。

T：あ、そうですか。

S：はい。 (韓上002)

(2)非完結の言いさし：話者の発話が完結せず、途中で話者が交替し、不完全な感じがする言いさし

例2) T：兄弟は？

S：３人兄弟で、上に兄、私、うーんと。

T：お兄さんは独身ですか。 (韓中中005)

3.3 使用状況のとらえ方

野元（1987）、熊谷（1997）、曺（2000）を参考に以下のように言いさし表現の機能をとらえる。

(1)情報要求（何らかの情報を与えるよう求める）

例3) T：質問は何でもいいです。

S：うーん、先生の専門は。

T：専門ですか。 (韓中中005)

(2)行為要求（何らかの行為を行うよう求める。または、勧める）

例4) T：今は、日本語サークルだけですか。

S：・・もう一度。

T：あ、ごめんなさい。　(韓初下001)

(3)注目要求（相手の発話の一部を繰り返し表現し、確認したり、話者自身の発話が正しいか、確認する）

例5)　T：家は。

S：・・いえ・・

T：家。

S：・・いえ・・　(韓初下001)

(4)注目表示（相手の発話を認識したことを表示する）

例6)　S：おとうと？

T：おとうとさん。

S：おとうと。　(韓初下001)

(5)情報提供（事実内容などを伝える。客観的事実に関する質問に対する答え）

例7)　T：アメリカの映画は見ますか。

S：たびたび見ますけど。　(韓中中005)

(6)意志表示（話者の感情,意志などを表明する。それらに関する質問への答え）

例8)　T：じゃ、あの、今日はどうもありがとう。

S：はい、いいえ、こちらこそ。　(韓中上001)

(7)発話補完（聞き手に正しく理解してもらうため、または言い足りないことを言うため、補足、前発言の理由の言及をする）

例9)　T：あとじゃあ、スマップの木村君がでたドラマ、おもしろかったですか。

S：おもしろかったです、とっても。　(韓中中005)

4.結果及び考察

4.1言いさし表現の使用頻度

学習レベル別に、全体の学習者の発話に対して、言いさし表現が占める頻度を以下の表1に示した。（ ）の中の数字は発話数である。

学習レベル別に、全体の学習者の発話に対して、言いさし表現が占める頻度は約11%から14%ぐらいにかけて占めており、初級、中級、上級、超上級というレベルによる有意差は見られなかった。

表1

学習レベル	言いさし表現の頻度	全体の発話数
初級	(89) 14.4%	(617) 100%
中級	(194) 12.8%	(1522) 100%
上級	(238) 11.8%	(2020) 100%
超上級	(142) 11.3%	(1254) 100%

4.2 言いさし表現の種類による使用頻度

学習レベル別に、完結の言いさしと非完結の言いさしが占める頻度を以下の表2に示した。

表2

学習者	完結の言いさし	非完結の言いさし	合計
初級	(45) 50.6%	(44) 49.4%	(89) 100%
中級	(95) 49.0%	(99) 51.0%	(194) 100%
上級	(183) 76.9%	(55) 23.1%	(238) 100%
超上級	(93) 65.5%	(49) 34.5%	(142) 100%

学習レベル別に、完結の言いさしと非完結の言いさしが占める頻度は次のとおりである。まず完結の言いさしは上級レベルで使用頻度が高くなり、超上級レベルになると減る傾向にあった。さらに非完結の言いさしは上級レベルで使用頻度が低くなり、超上級レベルになると高くなる傾向にあった。

以下、数的にも優位にある完結の言いさし表現に焦点を当てる。

4.3 完結の言いさし表現の使用状況

学習レベル別に言いさし表現がどのような状況で使われているのか、機能の観点から占める頻度を以下の表3に示す。

学習レベル別に言いさし表現がどのような状況で使われているのか、機能の観点から分析した結果は次のとおりである。

注目要求と注目表示の機能はレベルが上がるにつれて、その頻度が低くなる傾向に

表3

学習者	行為要求	情報要求	注目要求	注目表示	発話補完	情報提供	意志表示	不明	合計
初級	(3) 6.7%	(4) 8.9%	(15) 33.3%	(6) 13.3%	(6) 13.3%	(11) 24.4%	(0) 0%	(0) 0%	(45) 100%
中級	(2) 2.1%	(8) 8.4%	(7) 7.4%	(2) 2.1%	(29) 30.5%	(32) 33.7%	(11) 11.6%	(2) 2.1%	(95) 100%
上級	(2) 1.1%	(9) 4.9%	(3) 1.6%	(0) 0%	(51) 27.9%	(93) 50.8%	(20) 10.9%	(5) 2.7%	(183) 100%
超上級	(1) 1.1%	(7) 7.5%	(1) 1.1%	(1) 1.1%	(24) 25.8%	(39) 41.9%	(19) 20.4%	(1) 1.1%	(93) 100%

あった。発話補完の機能は中級レベルになるとその使用頻度が高くなる傾向にあったが、中級レベルと上級レベル、超上級レベルまではその使用頻度の有意差が見られなかった。情報提供の機能は上級レベルになると使用頻度が高くなる傾向にあった。また意志表示の機能は中級レベルになるとその使用頻度が高くなる傾向が見られた。以上をまとめると、初級レベルの学習者は日本語能力が十分ではないためか、スムーズに会話が運ばない場合が多く見られた。その結果、相手との意思疎通のため、相手に確認作業を行う注目表示の機能、相手の発話を認識したことを表示する注目表示の機能が多く使用される傾向が見られたのではないかと思われる。中級・上級・超上級レベルになると、意思疎通が問題にならないためか、注目要求と注目表示の機能があまり使用されない傾向が見られたのに対して、情報提供の機能と正確な意思伝達のため、前発話を補足するような発話補完の機能、話者の感情と行動を表示する意志表示の機能が多く使用される傾向が見られた。

5.おわりに

これまで言いさし表現の研究では形式の面に焦点をあて、その一面について言及されてきた。本研究では自然発話を対象として言いさし表現を完結の言いさしと非完結の言いさしに分類し、その使用頻度を把握した。また完結の言いさしを中心にその使用状況を体系的にとらえ、韓国人日本語学習者の習得状況を明らかにした。

今後の課題は中国人学習者とアメリカ人学習者の言いさし表現の習得状況を明らかにし、上記の結果が個別的な韓国人学習者の特徴であるか、他の学習者と共通の普遍的な特徴であるか、明らかにしていきたい。

参考文献

生駒知子・志村明彦（1993）「英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー：『断り』という発話行為について」『日本語教育』79号

柏崎秀子（1993）「話しかけ行動の談話分析－依頼·要求表現の実際を中心に－」『日本語教育』 79号

熊谷智子 (1997)「はたらきかけのやりとりとしての会話」『対話と知』新曜社

鮫島重喜（1998）「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程－中国語話者の『依頼』『断り』『謝罪』の場合」『日本語教育』98号

佐藤勢紀子（1993）「言いさし『が／けど』の機能－ビデオ教材の分析を通じて－」『東北大学留学生センター紀要』第1号

曺英南（2000）「『けど』で終わる発話の語用論的研究 －『言い終わり』の『けど』を中心に」『言語文化と日本語教育』19号 お茶の水女子大学

野元菊雄 (1987)「日本語教育映画基礎編 総合文型表」国立国語研究所

山本富美子（1989）「待遇表現としての文体」『日本語教育』69号

(韓国 全南大学 講師、全南大学人文科学研究所 研究員)